都市的宗教
ー歴史的視座から見る宗教と都市ー

イェルク・リュプケ

要旨

本稿はまず、歴史上の宗教実践と都市生活は互いに支え合いながら形成されてきた、という主張にはじまる。宗教と都市的生活様式は互恵的に形成されてきたが、この両者は、a)都市における小規模な共同体での生活を発展させるとともに影響を与える(「都市化する」)要因と、b)都市における要素(「都市化された宗教」)として作用する要因、という宗教の二重の語義に沿って発展する。本稿の議論は、場所を獲得して実践される宗教をめぐる基礎的省察に始まる。我々にとっておおむね「都市的宗教」とみなすことのできる現象は、歴史上の都市どうしの複雑な関係や漠然とした「都市的共同体」を観察する「レンズ」の役割を担う。それはつまり、特定の場所に規定された宗教の性質であって、いかなる都市的共同体の発生よりも早くから存在した現象として理解され、理論に沿って類型化される必要があった。それでは、宗教は他の文化実践以上に、すぐれて空間に規定された多様性を備えているのだろうか。研究史において「聖地」は、聖なるものの顕現という性質をもつ場所としてひときわ目立つ役割を、特に宗教への現象学的アプローチに限らず、聖性の中心となる場や巡礼の研究において担ってきた。ほかのさまざまな視角からは、宗教の時間的側面（日課、危機儀礼、通過儀礼、回心、暦）は前景化されてきたが、宗教における場所については、たんなる舞台としての役割に限定する議論が行われてきた。本稿では「都市的宗教」を扱うために、共同体の性質に鋭く反応しながら、宗教的行動という、共同体の性質を形作る場を拠点とする実践の再構成に関するいくつかの試論を提示する。

キーワード

都市化(urbanization)、生きられた宗教(lived religion)、宗教の変化、場所に依拠する実践、都市性(urbanity)

はじめに

「宗教と都市性[1]の互恵的形成」を問うにあたって、この問いの理論的経験的対象を的確に定義する概念が必要である。私の基本的な関心対象は明らかに宗教と宗教史である。「宗教」はなんら所与のものではないが、本稿で研究考察するような経験と観察にもとづく個々の歴史研究の背景にある理論の対象としても、この研究を遂行可能にすると考えられる概念の対象としても解釈される[2]。宗教と都市性の関係を関心の対象とする近年の研究からは、「都市的宗教」の概念からまず取り組むべきだという示唆が得られる。「可視的宗教」「物質宗教」あるいは「イコン的宗教」[3]のように、名辞は宗教に特定の角度から近づいてゆく。しかし、「都市的宗教」は美的な側面や、むしろ実践の見地から見て、宗教において媒介となる性質を備えた部分に焦点を当てるのではなく、特定の空間的立地、すなわち都市における宗教を対象とするとともに、以下に論じるように、現代のグローバル化した都市におけるポスト世俗化の宗教を対象とする。本稿で扱いたいのはまさにこの問題である。

本稿の目的は、歴史研究を援用した視点から都市的宗教について精査することである。筆者の題材が古代地中海世界に拠るものだとしても、ここではさらに包括的な方法に拠る概念を提案したい。すぐに明らかになることではあるが、「都市的宗教」は緩やかに事象を覆う傘となる名辞であり、ほぼ独占的に、現在を中心として、長い過程を通観する一連の調査を結ぶのに役立つ(1)。しかし、理論化された宗教概念（都市的宗教に見える宗教）よりも偶発的な配列（都市的宗教として生じる宗教）を叙述する者の見地に立てば、現在の「都市的宗教」の用法はさらに、空間的実践としての宗教に関する根本的な省察によって補完される必要がある(2)。このような分析基盤においてのみ、宗教と「都市」に関するもっとも実り豊かな視座に立つ問いへと戻ることができる。ここでは、「都市」あるいは都市的空間よりもむしろ、宗教と都市化のもつれた関係を探究したい(3)。分析的に解読を試みるならば、このもつれは二つの方向からの考察を要求する。まず、都市化の過程、すなわち都市の発生における宗教の実践と理念の役割を(4)、ついで、ここでのもっとも重要な課題である宗教の都市化の効果を概観する(5)。どちらの節も、それぞれの組織のたどった相異なる道の複数性を要約するだけの試みというよりは、都市的宗教の研究における歴史的転回の重要性を信頼にたるものとする試みである。このようにしてどちらの節も、今後の問いに資する鋭くも含蓄ある名辞の提案で終わる。つまり、「都市化」と「都市化された宗教」である。両者の限界を示唆して、本稿では筆を措く(6)。

1. 都市のなかの宗教に注目する

歴史学者や、古代地中海宗教史研究者の視点からは、宗教（恐らく非常に古くからある行動の方法）と都市（それよりは新しい形態の人間の共同生活の場）は二つの非常に異なる研究の系譜によって主題化されてきた。また、宗教は都市を安定させ、統治を容易にする重要要素として観察されてきた。古代地中海世界の研究においては、「ポリス宗教」あるいは「都市的宗教」はこの現象を把握するための名辞であった。他方で、現代の都市に対する新鮮な見地は、新たな形態の宗教を見いだし、近代化理論を援用し、「都市的宗教」を同定することで幅広い宗教現象を解釈してきた。まず第一節で簡潔にこれらの相異なる立場と語法を概観して接合させたのち、より簡素な説明に資するモデルに置き換える方法を準備する。ここではさらに権力の正当化あるいは多様性に注目し、さらに複雑な観点から、相異なる歴史上の時代や地理的空間において逸脱したり対立したりすることもある都市的宗教の確立の過程を認識する。

1.1 宗教と古代都市

宗教は都市の歴史において、たとえば都市の定礎と定礎儀礼、移民の波、変容、ゲットー化と破壊といった劇的な発展の原因であった、とする観察は新しいものではない。宗教は大規模な集団の反抗と同様に市民権という概念を形成する決定的な要素でありつづけてきたし、中心の記念碑化に貢献し、中心から外れた場所を重要な場所に変えた。近年の「アメリカ合衆国における宗教と場所」への序説が「歴史宗教はおおむね都市的現象である。すなわち、宗教と都市は人類史を通して分かちがたい関わりを培ってきたのであり、それぞれの発展において互いに依存しあっている」という定義を提示するほどである。この序論の著者、ロバート・N・ベラーは歴史志向の社会学に立つ貴重な見解を提示した上で、この定義はむしろ文面以上に限定された意味をもつ、と直ちに示唆する。「宗教、権力、そして権力の場所は、都市という共生関係において互いに複雑に関わりあっている。この宗教と都市生活の再生産というパターンは歴史の大半を通して存続してきた」[4]。この定義はしばしばメソポタミアの神殿の山々、すなわちジッグラトのイメージをもって詳述されてきた。しかし、ヨーロッパにおける研究の伝統においては、その関係を精査することが許されてきた時代がほかに存在した。つまり、地中海沿岸における前古典期ギリシアからローマ帝政期に至る時代という、刷新され、拡大された都市化の波の時代であった。

実際、歴史的視点における宗教と都市化の関係の研究は古典学者ヌマ・フュステル・ド・クーランジュの『古代都市』によって開拓されてきた[5]。フュステル・

ド・クーランジュはフランスの社会学者エミール・デュルケムにとっての重要な師である。都市研究においては、フュステルは開拓者として知られている[6]。私が別稿で論じたように、宗教学においても彼の複雑なアプローチからは多くの示唆が得られた[7]。しかし、宗教史においては、彼の発想の一部が健在であるはずの古代宗教研究のなかですら彼の名は驚くほどに無視されることが多かった。

彼の発想は問題があると言わざるをえないほどに狭いが、たとえばフランソワ・ポリニャックがギリシアの政治的に独立した都市（ポリス）を観察して提示した「中心と周縁（コーラ）」という複雑な模式図のような、より広い可能性をもたらしそうな考え方に従って表現の意義を発展させる系譜のなかで受容されてきた[8]。通常は中心地に立地する神殿の立地や、公的儀礼のための公的空間といった決定的な意味を持つ場所が創られる場面を把握するために「ポリス宗教」という名辞は広く用いられてきた[9]。ここから政治コミュニケーションや古代都市の誕生にかんする多くの豊かな研究が導き出されたが、空間的な政治の実践ではないかぎりは、空間的実践よりも都市のアイデンティティが注目されてきた[10]。

「生きられた宗教」というアプローチを展開させる基礎となったオルシの「都市の神々」の鏡像は興味深いが[11]、古代の「都会の宗教」の研究において、生きられた宗教の概念は援用され、「生きられた古代宗教」へと拡張された[12]。葬送儀礼と家庭の宗教、任意の社会的集団による社会と儀礼での実践（「祭祀集団」と「宗教」）や、公職者や政治エリートによる宗教の政治的利用は、宗教的実践を構成するそれぞれ別の要素でもなければ、「市民宗教」に対抗する図式の再現でもないということが立証できるかもしれない。後者は、常に不安定な宗教的権威が生じるさまざまな場所とともにある実践の地平においてもっとも適切に概念化される。

「生きられた古代宗教」の方法は、政治的エリートや著作家、実践家や一般大衆の宗教実践をその多様性に注目して分析するための道具を発達させてきた[13]。コミュニケーションとしての宗教実践と宗教にかんする行動に注目することで[14]、この方法は公と私に単純化された二分法に疑義を呈するとともに[15]、宗教における媒介性（エージェンシー）や、実践と媒体にみられる宗教の実例による裏付けや、このような事実に裏付けられた宗教が行動と経験にもたらす効果や、宗教の語り（と再話）、さらには究極的には語られた宗教の役割という概念を発展させた。宗教とは、ここでは「生成しつつある宗教」を意味する[16]。この概念は南欧と西欧、西アジアと北アフリカの宗教における前近代の研究に由来し、移動と関係と宗教実践の上で重要な特定の社会的空間的組織を結節点とし、宗教に変化をもたらす原動力として扱う必要があった。ほかの文化圏、つまり、中国やインドのような地域や古代末期の東地中海や中世の中央ヨーロッパや初期近代の北ヨーロッパのような相異なる

文化をもつ場所では、宗教実践と信仰は都市形成の過程においてどのように形成され、また都市形成の過程はどのように宗教によって形を与えられたのだろうか。当然、地球規模で明快に整理された「都市的宗教」に眼を向けなければならない。

1.2 近代のグローバル都市における宗教

都市研究の領域は全体を見れば多彩ではあるが、都市の基本要素としての宗教を研究対象とすることはめったになかった。それどころか、都市研究は 1980 年代以来発展してきた「宗教地理学」を無視してきた[17]。しかし、「宗教地理学」という都市研究の下位領域が理論の発展にごくつつましい貢献しかできなかったことは認めなければならない。もっとも最近の形態ですら、ある程度の経験と観察にもとづく研究と発展的課題の探求に留まっている[18]。しかし、近代化とグローバリゼーション、とりわけ「都市へのあこがれ」を理由とする移住じたいが、都市と都市での生活に寄せられるイメージとイメジャリによって生み出され[19]、また、それに伴って、新しい形態の宗教実践が発展し、非エリートが都市空間を占有[20]したことが、宗教学と人類学において現代の都市の宗教に対する新たな関心を喚起してきたのである。

この方法論は現在、ミシェル・フーコー、アンリ・ルフェーヴル、そしてエドワード・ソジャが（対抗文化の空間にとくに注目して探求した方法で）分節化した空間性と空間の性質に対して充分に意識的であり[21]、空間と「場所の形成」に適用される、空間と階級に依拠した差異の社会学に引き継がれた[22]。この「空間的転回」はキム・ノットによって継承され、ただちに彼女の「空間的分析」と「宗教の立地」は宗教学のプログラムに刺激を与えた[23]。一方、人類学者シュテファン・ランツは、「都市的宗教」の定義を「都市化と都市における日常生活の特定の要素であり……都市における生活様式と想像力、インフラストラクチャーと物質生活、文化、政治と経済、生活と労働の様式、共同体の編成、祝祭と祝典と……結びあわされる」事象として提示した[24]。それはさらに「都市と宗教が互恵的に関わり、互いに絡み合い、互いを作り上げ、変容させ、定義する継続的なプロセス」として詳述される[25]。

前述の「市民宗教」批判の並行現象として、媒介者（エージェント）が「下位の都市性」を喚起し、宗教実践を「規範的体制」として特徴づけるとき、ランツは媒介者（エージェント）の領域の拡大に注目する(Marshall 2009:11)。そこでは政治性が実践されるとき、権力のテクノロジーと個人のテクノロジーが結合される[26]。都市的なものと宗教的なものの調停の実践に対する関心は、仏教やキリスト教のような伝統にあって広く親しまれている宗教的な都市観、すなわち都市は根本的に世俗的な性質をもつものだ

という考え方とは対立する。

ランツの定義は叙述的というよりも指示対象を明確にするものであり、徹底した相互関係を認識させる。「都市的宗教」として定義される対象は過程であり、そこでは宗教と都市的なものは、「宗教」（あるいは「都市的なもの」）の部分集合として認識されるよりもむしろ宗教の状態に参与する現象である。精査対象の境界はむしろランツが提唱する研究課題「グローバルな祈りの諸相」の枠組みによって暗示される。デイヴィッド・ガルビンとアンナ・ストランは都市的宗教にかんする 2017 年の著作で、この領域を再検討して詳述した[27]。この二つの過程はたとえば、富と正義に資する宗教の役割という古い問いからは袂を分かって、必ずしも収斂はしないが互いに関わりながら姿を明らかにする。これは他方で、ポスト世俗化のはじまりでもある。世俗と宗教の分断とそれらが生じる相異なる体制のなかの新たな発展をめぐる見解には関わりなく[28]、宗教を「超多様性」あるいは「ハイパー多様性」の核心におく状況に至るまで、「代案の多元化」は誰もが症候として認識してきたことである[29]。「超多様性」「ハイパー多様性」とは、たくさんの異なる部分と、何らかのかたちで状況に応じて突出した状況を呈する複雑な過程を横断することである（近年のヨーロッパの言説において、「ムスリム」という名辞によって誇示される宗教的カテゴリーが覇権的な意味を帯びるようなものである）[30]。宗教における媒介者（エージェント）を定義するさいに、古風な学問実践ならばそれらに相異なる「複数の宗教」を割り当てるが、日本であろうと、中国であろうと、ヨーロッパであろうと、その他遠く離れた過去や現在の場合でも、この試みははっきりいってうまくはゆかないものだ、と私は付け加えたい[31]。他方で、グローバリゼーションはさまざまな移住の形態を経て進んでゆく都市化と多元化にとっての主な原動力であると同時に[32]、都市を巻き込み、場所を横断する流れのあらわれでもある。宗教にかんして言えば、「普遍」宗教が増大し、場所を横断して接触しまた出現する現象は地域の宗教を都市と同様に地域性の重要さを否定することなく形成する。ここでは多層的な「グローカリゼーション」は、まったく相異なる、ときには正反対の効果を提示しながら、地域の宗教的な権力や都市の権力に疑問をなげかけ、ときに補強する役割に応えてゆかなければならないのである[33]。

本研究における「都市的宗教」の主な用法は三つの重要な含意と意義をもつ。筆者は改めてこの語に取り組むとともに、さらなる展開を試みている。まず、一般的な意味合いをもつその語の対象は（ジョナサン・ツィッテル・スミスの語法において）宗教ではなく、グローバリゼーションに向けられている。「宗教」はグローバリゼーションを観察する「レンズ」の役割を担っている。グローバリゼーションと都市と宗教の絡み合いは、歴史研究の空間を開拓しない。宗教史家がグ

ローバリゼーションの概念を前近代の地域越境的現象や、普遍化、地方主義化や局所化、そしてそれらの相互関係に適用しようとするときでさえもそうである[34]。近代性の基底にある理論が欧州中心的ではないとしても、それをさらに援用することはここでは終わりにしなければならない。第二の含意は、分析の方向のうちにみられる。宗教はもはや空間的な資材との関係を詳しく定義する事象ではない。宗教はまさに、空間に向き合い、空間を扱う手段を用いなければならなくなったときに生じる。つまり、ここには「イコン的宗教」の言説のみがある。それによって、この問題にさらに迫ることができる[35]。ポスト世俗化の宗教の多元性における変化の可能性については、論点を真実だと仮定して議論を進めてもよいように思われる。結論としては、驚くべきことに「都市」や「都市的なもの」とは、少なくとも 800 万人から 1,000 万人の住民をもつ都市かどうかで定義される、まさに所与のグローバル時代の大都市の相貌の性質である、として疑われることがない[36]。都市的か都市的ではないか、宗教的か世俗的か、といった差異を作り出し、文化の所産として秩序をもたらす場所、すなわち「差異の形成される場所」としては認識されることがない[37]。この欠損については次の節で論じられなければならない。

2. 空間的実践としての宗教

私が広く関心をもっている対象は、人間の活動と経験の様式である。それらは人間という行為者（アクター）によって特別な[38]媒介者（エージェント）として認識されるコミュニケーションを構成するとともに建設する文化様式からは分離されている。この（行為の対象を含むこともある）特別な媒介者（エージェント）は、日常に生きる人間とは異なる性質を備えている。それらは死者（先祖）や生まれざるもの（天使）であり、正義（ダイモーン）であったり、完全に人間を越える存在（神々）であったりする。 しかし、これは名辞を与えられる存在の備える性質ではなく、いかに彼らが名辞を与えられるかを示す方法であり、この方法がこのコミュニケーションを異質なものにする。実際にはそれらは媒介者（エージェント）として調和している。すなわち、それらが「この状況」で発揮する能力と、「その状況」におけるふるまいの妥当性は、疑いなく真正である。この名辞の賦与が行われる状況は、ふるまいの妥当性と同様、名辞を与えられる存在が備えているものとされる性質と関わっている。宗教的コミュニケーションはつまり、リスクを伴うコミュニケーションの形式である。私が、宗教における行為者（アクター）の視座から把握しようと試みている事象はまた、系譜を発見する視座に立って統合することもできる。そこでは、「いかにして人は《日常の経験に

よっては表象できない超越を内在的な方法によって描くかという問題、つまりいかにして人は手にふれられないものを手にふれられるものに変えるか、という問題と宗教がかかわっている》」[39]。

行為者（アクター）の観点からすれば、このような宗教におけるコミュニケーションの形態は結果として生じたものである。このような「神的な」媒介者（エージェント）とコミュニケーションをとること、あるいはそれらと（方便として用いるために）関わることは、人間の媒介性（エージェンシー）を強めたり弱めたり、社会的関係を創出したり形成したりすることもあれば、権力関係を変化させたりするかもしれない[40]。宗教における媒介性（エージェンシー）は貨幣の両面である。つまり、a)人間ではない存在や、人間を越える存在という媒介者（エージェント）に帰される媒介性（エージェンシー）と、b)このコミュニケーションに参与して名辞を与えられる存在によって簒奪されたり、そのような存在のものとされたりする媒介性（エージェンシー）である。このような語り手は「神的存在」に媒介性（エージェンシー）を帰することができるだけでなく（この語り手はその場で、また底流にある伝統に依拠して解釈するのだが、）、媒介性（エージェンシー）を簒奪し、それを彼女あるいは彼自身の媒介性（エージェンシー）とする。たいていの場合はほかの共同体の成員に対して、この媒介性（エージェンシー）は神的存在に名を与える者に帰されるものだと主張されるが、神的存在がまさにそこに存在しているか存在していないかは問題とならない。すでに定義したように、宗教は、権力の技術としても、個人の技術としても利用することができる。このいずれの場合にも、実践者であるか、その他大勢の観察者であるかによって行動の状態は変わってくる。

ほかの文化実践と同様に、宗教的コミュニケーションは場所と時間に結びつけられた実践であって、時間と空間のなかに位置づけられ、時間と空間とかかわりをもつ。「適用（アプロプリエーション）」はこのかかわりを叙述するひとつの方法である。しかし、ミシェル・ド・セルトーが主張したように、それは単に受動的な意味を込めて用いられる術語ではない[41]。特定の空間は、選択に従って用いられる。それは以前からある、共通の、またはすでに定式化された用法に従って定義された空間の性質を認識し、受容することだが、一方で行為（パフォーマンス）によってこの空間を変える営為でもあるから、この空間の未来の記憶をも変える営為であるともいえる。宗教的「伝統」ですら、単純に与えられたものではなく、営々と再生される必要があり、利用者が微細な（しかも革新的なこともある）変更を加えることで形作られてゆく。これこそが、いかなる場合でも、宗教の動態観察の核心である。

このような適用（アプロプリエーション）は空間にも時間にも関わる。空間においても、時間においても、その用法は柔軟であるかもしれない。それは（世俗の比喩を用いれば）はかないものかもしれない。その用法はまた、周期的に採用されたり、永続性を備えたりさえもするかもしれない。なぜなしに与えられたものに名辞を与え、手

に触れられない超越を触れられるものとするために、この問題を提起することで、宗教におけるコミュニケーションは大いにメディア化され、「物質的宗教」になる傾向がある。コミュニケーションのために、コミュニケーションにおいて用いられる手段はメディアであり、それらは多かれ少なかれ、一時的あるいは永続的に宗教におけるコミュニケーションを伴い、結果として「聖化」される。このようにして空間は宗教的あるいは非宗教的な媒介者（エージェント）によって試され、眼には見えない状態か、あるいは不法な状態で占有される。誰にでも開かれた、手に届く空間（必ずしもつねに中央集権化されているとも、「公的な」所有権のもとにあるとも限らない）は奪い合いの対象になり、場合によっては譲渡されることもあっただろう。

「場所を作ること」はこの過程をめぐってまた異なる視座を提示する。ちょうど「暦の作成」といった現象が比喩として使えるだろう。つまり、秩序を作って、相異なる方法で時間に正当な性格を与えることでもある。現在では、メンタルマップと、自宅にいるかのようにくつろいだ気分と、ある雰囲気と場所に対する感情的な関係の経験とを結びつけることが可能な実際の用法のパターンに加え、とりわけ何にもまして場所への愛着が強調される。特定の関係や、明らかな指標、あるいは所有権ですら中心となる。宗教実践と象徴はその道具として用いることができるが、グルーピングの過程や、ネットワークの形成や親密な組織はより直接に関連する。小さな神殿や袋小路、近所の、あるいは広く知られた聖域はこのような場所の形成の結果かもしれない。時にそれは聖化され、ときに聖化されないこともある。ここで、我々はいっそう「宗教」とみなされる実践の詳細に踏み込もうとしている。それでもそのような場所もまた他者によって濫用されたかもしれないし、1980 年代以来の大潮流[42]、あるいは、ほかの誰かや（ネイションのような）もっと大規模な集団が、あるいは単純にここ数十年の京都で目撃された殺到する観光客の群れのような集団が[43]「伝統」を主張することで専有物の座を奪われたかもしれないのである。

最初の定義から示唆されるのは、ここには宗教をめぐるコミュニケーション、すなわちほかの文化実践には適用不可能な関係をめぐる理念は、特定の空間的性質を備えているということである。場所をつくることは「住まう」ことと同じ行為とみなすことができるかもしれないし、それはしばしば宗教実践によって達成され、宗教をめぐるコミュニケーションはトマス・ツイードの指摘に括弧をつけて強調して引用するならば、本来「横断（crossing）」の実践であるともいえる[44]。「宗教」はここでは、いま、ここ、に生じる改めて問うまでもない状況を（まぎれもなく単純な意味で）越えてゆく行為として定義されている。此方 hic と彼方 illic の関係の調和をはかることは、以前から困難であった。ジョナサン・Z・スミ

スが定式化したような、家庭や公的空間といった多様な祭場の性質によって規定された祭儀において、ここ here とむこう there の調和をはかる事例である。宗教にかんするコミュニケーションの根本にある媒介性（エージェンシー）を用いた場所の横断に言及するときは、礎を提供する事象として位置づけられた「軸の時代」において出現する超越や、それに先立つ物質的（イコ）象徴（シン）や表象と現存、神人同形説に拠る形象、あるいは神人同形説に拠らない形象、イメージあるいはイメージの欠如をめぐる討論を待つ必要はないといえる[45]。

都市化が空間を稠密にすると同時に区分を設け、より大規模な包摂（あるいは罠の設置とすらいえるだろう）と排除をもたらし、さらには「宗教」として定義されて「都市的」共同体が認識されるよりもはるか以前から発展をとげてきた行動の種類に関わるものであるならば、それは都市化を助けながらも衝突する独自の現象であり、少なくとも実効性のある遠隔コミュニケーションの登場以前から存在するだろう。この視座に立てば、宗教のための場所は同時に a)どこにもない場所、すなわちマルク・オージェのいうアイデンティティをもたないトランジット・ゾーンというよりも、ミシェル・フーコーのいう経験を越える意味でのヘテロトピアである[46]と同時に、b)特定の都市的アイデンティティの指標となり、そこに注意を喚起し、しかも強化する場所である[47]。儀礼はミニアチュア化され、あるいはヴァーチャル化されるが、祈りは心のなかでどこででも行うことができる。都市における表象による統制の技術は、宗教の実践が知的な討論や聖典や儀礼の実践よりも儀礼への注釈を主な関心とするようになると、逃避の場として用いられがちになった。宗教と都市化のもつれという複雑な観念を扱うためにも、この様相は検討を要する。

3. 宗教と都市化

宗教は単なる所与のものではないことは、宗教研究者にとっては自明のこととなりつつある。宗教とは、その限界と有用性をめぐる開かれた議論が受け容れられるようになるために解明されるべき学問上の構成概念である。ほかの場所でも論じたことであるし、ここでも簡潔に素描したが、行為者（アクター）中心型の場合、キリスト教的偏見あるいは西洋的思考に依拠している、というありふれた批判とともに出現する陥穽の多くを回避し、空間のなかの実践としての宗教モデルを構築する余地を与える。「都市的」そして「諸都市」という表現すらも概念の位置づけはそう大差ない。自己言及に先立つ圧倒的な証拠があるとはいえ、この種の用語にはさらに詳しい説明が必要だ。現在の都市の成長に直面していると、このような

細部は検討しなくてもよいように思われるが、近年の「都市的成長」は、我々が知らなかっただけである程度は共同体が都市共同体の各部分に再分類された結果であり[48]、それらは共同体の変化のパターンというよりも行政上のさまざまなアプローチと都市の理念の反映でもあるということを我々は知っておくべきである。（グレーター・）ロンドンのような都市からは、このような概念化がいかにして数十年のうちに変化をとげたりとげなかったりするかが示唆される。「都市的」とはなにか。それは分類と宣言の問題であって、統計的事実の問題ではない。

私は「都市」を、「田舎」「原野」「文明化されていない」あるいは（少なくとも時々は）より侮蔑的ではない「村」や「郊外」といった表現で描写される「都市ではないもの」との相違をおのずから明らかにする対象言語として扱う。つまり、「都市」とはまさに人々が差異を作るために、そしてしばしば（遊牧のような定住しない形態や移牧も含む）共同体の形態に序列を与えるために用いる分類操作の探求へと招く概念である。

以下、私は「都市的」を、（全員がひとりひとり顔を合わせることが可能な 150 人をはるかに越える規模での[49]）大人数が稠密な共同体を形成するパターンを含意するメタ言語的表現として用いる。その特徴は、それぞれが相互に濃密な関係を結んでいることにある。しかし先に述べたように、そこには文化上も歴史上もさまざまな意味で同じように「都市」としてみなされるほかの共同体という外部とのつながりも存在する[50]。第二の要素として、重要な因果関係をふたつ挙げることができる。都市共同体はきわめて遠い地点にしかコミュニケーションの結節点が存在しないかもしれない場合であっても、ばらばらに独立して現れるのではなく、ネットワークの形態で出現する。また、都市的環境における多様性は地域による差異と距離の制約があったしたとしても、数がもたらす単純な効果を凌駕し、文化間の接触と移住によって強化される。

その議論を前提に、私はエルフルト大学の歴史学者ズザンネ・ラウの見解に同意する。ラウの見解は次のようである。「都市化」と、あるいはより端的にいえば、さまざまな都市化現象と「都市性」を区別するとき、「都市化」を「都市共同体」の成長とその伝播という相異なる性質をもつ両面を備えた道（つまり「都市空間の定礎と受容と適用の歴史」）に見立てる。また「都市性」を、住民自身が（「都市」を定義していることはここでも改めて言及しておくが）「都市」に住んでいるという実感を得ている、という事実によって定義される、さまざまな都市にみられる特定の生活のやりかたとして理解する[51]。それは、ここに生じる宗教の変化を観察するための「レンズ」を提供するより広い意味での歴史の過程としての各種の都市化現象である。このことは、たとえばクリスティアン・シュミットが

「地球規模の都市化」と診断したような現象が成就しつつあるという主張に抗って眼をつぶるものではない[52]。それは都市的な生活の方法の諸要素として認識され、遠く離れた場所でも模倣された、とりわけその結果として都市への移住をもたらす、不均衡で覇権主義的な都市性の一部である。それでも「都市的なもの」は、都市の外部における修道院の建設であれ、庭園都市や離島で展開される「自然に帰れ」であれ、移住からオルタナティヴな生活と共同体の様式までをも包含する、暴力的な、あるいは心からの、ともいうべき拒否反応を導く。媒介者（エージェント）がその場から後退する「都市的なもの」か、あるいはそこに吸収されることを拒む「非都市的なもの」であるかどうかは重要である。少なくとも宗教史においてはそうである。今日の「グローバル都市」は気候変動や人口問題や持続可能性への解答である、という都市科学研究者の主張は正しいかもしれないが、イデオロギーに対する懐疑、つまり、基本的にはそのような主張は都市という覇権的なイデオロギーの一部なのではないかという疑念の吟味に耐えるものでなければならない。宗教に関する主張と同様、都市的なものにたいする主張を注視しながら、自己言及性を我々のこの企てでも保つことが必要である。

4. 都市化のファクターとしての宗教

宗教と都市化の議論において、宗教が破壊的な効果を及ぼす可能性が言及されるようになってきたのはごく最近のことである。排他主義者の集団が醸成しがちな緊張と、彼らが原因となって生じるかもしれない分断と、宗教がそれとは相異なる差異の次元で強化するかもしれない緊張と分断は非常によく似ている、という観察がこのとき指摘される[53]。たとえば本稿でも簡潔に素描したフュステル・ド・クーランジュが行ったような複雑な現象の再構成から始めようとしてもうまくゆかず、むしろ権力を正当化したり、人々の連帯を増大させたりする方法としての宗教が注目されてきたのである[54]。対抗勢力や周縁化された媒介者（エージェント）にとってだけではなく、権力を持つ側にとっても媒介性（エージェンシー）の拡大の道具となって、 宗教にかかわるコミュニケーションは、罠に掛け、支配し、単一化するかと思えば多様性を固定化してほかの独立した空間を調琢する、という特徴を備えて、都市に緊張をもたらすいずれの側にも見いだされてきた。宗教と都市化の関係の分析は、都市化以前、そして都市化の初期の定住時代にまで遡って、複雑で矛盾をはらんだ系譜をたどって行われねばならない。

さまざまな叙述のなかで、宗教は現実に都市を定礎する道具として用いられる。媒介者（エージェント）にはより幅広いことができるものだ、とする視点からすれば、適用（アプロプリエーション）

の戦略にかかわり、場所を聖なるものとし、聖化さえもするという宗教実践のそのほかの属性はいっそう重要に見える。都市的共同体における多様性と稠密性に注目すると、宗教に関わるコミュニケーションとその場所と人とのつながりは、不適切に定義された空間の外側に「場所」を築くのに役立つ[55]。古代ローマでごく早い時期から強制された共同体の空間と墓域の分離は、祖先や葬儀の実施と祖先祭祀を往々にして諸都市の壁の外側のあいだに広がる空間に結びつける戦略の原動力となった。おそらくかまどと家屋に見いだされて神名を与えられた神格ラレスの概念が分離されたことで、居住空間と死者に強い関わりをもちえなくなった場所の適用を可能にしたのかもしれない[56]。

ここで提起された議論をまとめるにあたって、宗教実践はすべての、あるいはほとんどの都市化の過程においてもっとも重要な要因だった、とは私は主張しない。しかし宗教実践は、ごく初期の段階から重要な要因だった。そのようにして、それは都市共同体において、徹底的に多様性と権力の複数性をともにつくりあげてきた要素ではないにしても、それらを作る力を与える要素ではあった[57]。都市に留まることも、他者とは違う存在でありつづけることもできたのである。これらのすべては都市共同体の歴史において宗教実践が都市の地誌や建築を形成するだけにとどまらず、このような共同体の記憶と「伝統」に立脚した「ブランディング」をも行ってきたということを否定するものではない[58]。はるかに根本的なのは、宗教は支配と統治には可能な限り、都市における憧憬と場所の構築をもって応えてきたということである。奈良からテノチティトランに至る事例を媒介に検証するに値する仮説である。

5. 都市化された宗教

宗教とは、都市共同体のなかに偶発的に生じた巡礼地の発展、または他の理由や後の歴史叙述の潤色のために案出された都市の定礎のために行われる定礎儀礼の適用をはるかに越える要因である。そうだとしても、私はこれらの配列は重要ではないと示唆するつもりはない。しかし、このような制度化された宗教の実践や、思想や、社会的形態はまた、変化という語で表現するにはあまりに大きい変容を蒙った。すなわち、それらは都市の状況に応じて形成されるのだ。都市の状況とは、都市の空間や、都市共同体におけるほかのさまざまな特徴のことである。私にとって、この領域は回顧と集大成の対象というよりも、今後数年の研究の中心にある。したがって、私はここでは因果関係について論じるよりも、豊かな結

実の可能性を示唆しながら、最初の暫定的な観察を提供することしかできない。ここでは六項目を具体的に列挙する。

1) 宗教は何千年にもわたって、もっとも内在的な形態からもっとも超越的な形態までもが、祭司王[59]からシャーマン[60]へ、そしてローマ帝政初期から 21 世紀の為政者に至るまで、権力の固定化と権威の付与に寄与してきた。稠密に構築された都市の環境において、宗教がこの機能を継承しようとするならば可視化されなければならない。しかも印象深く、永続性のあるかたちで。宗教の「記念碑化」は現在ならモスクワにも、バンコクにも、イスタンブルにも、マッカにも見られるが、その他多くの土地でも過去と現在にわたって同じように広く見られる現象だ。記念碑的な意義をもつ聖なる場所は、祖先たちと同じくモノのなかにも見いだされるあいまいともいえる神々の姿や混淆の進んだ神性の概念といった背景と対置されるが、場所を永続的に宗教のために用いるだけにとどまらない。それらは神格の性質を定義し、特定の場所と結びつけられるとともに物語によって細部まで練り上げられた神々や聖人として体系化し、イメージ、つまりますます安定した物質的象徴（イコン）と名辞と叙述のネットワークを作り上げる。このような（神々または聖人にもとづく）複雑な多–神教の安定形態は、都市化以前の共同体には想像しがたいし、さらに細部まで練り上げられた超越的な神性の観念を無視して作用することもある。

2) 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての爆発的な都市の成長の時代を生きたヨーロッパの思想家たちは、都市に住む人々のために新しい環境が必要だ、と強調した。都市の生活は主体化の新たな形式を求め、また創出した。個人はメンバーとして加入した（個人をさして「彼が」と表現するのは、書き手たちが男性だったからだ）さまざまな社交サークルによって人格を形成され、社交のなかで出会うときには互いの距離を模索しなければならなかったが[61]、新たなタイプの「個人化」は環境の流動性も、つねに遭遇の機会がいかに重要であるかを念頭におく状況にも適応可能だった[62]。宗教にかんしていえば、その主題は祖先とその人（やその人たち）自身の住む場所とのつながりを失った[63]。祈り、瞑想、修徳修行のような宗教実践は都市に住む人の自己鍛錬の新たなかたちをもたらした。この過程はすでに世界中の前近代の諸文化と同じく、古代の環地中海圏の諸都市にもみられたことである[64]。

3) 都市化が宗教上のコミュニケーションの軸の両端をたゆまず変貌させつづけたのであれば、それらをメディアが仲介するようになるという結果がさまざまな場面で生じたことになる。群衆が集う複雑な都市を統治するための課題、たとえば生活必需品の集積と貯蔵と分配の実現における課題が生じた結果、記録や広義

の識字のシステムが早くから形成された。宗教に関わるさまざまな行動に採用された関係や資産の譲渡は、その影響を受けて発展した。奉納物の奉献のさいには奉献者と被奉献者の名が耐久性ある方法で可視化され、記録されることが可能になった。複雑な祈りは召喚されるもろもろの力には解読できるように、しかし人の目には、とりわけ呪術の対象となった人物には解読できないように、呪文の形で発展させることが可能になった。しかし、宗教における聖典化は進んでいった。テクストが作成されると、より簡潔でくり返し唱えられる祈りや讃歌の制作ばかりか、儀礼実践の体系化や、このような実践にそれぞれに意義を付することも、究極的には神学として結実する聖典と、呼びかけられる対象にかんする体系的な省察が容認されるようになっていった。系譜と歴史叙述は輪郭の明確な（そしてしばしば論争的な）アイデンティティと主張とを創出した。中世から初期近代にかけての秘儀文献は、現代のインターネット宗教の先駆ともいうべき宗教実践のヴァーチャル化のために著された。暦と地図は同様のプロセスの結果である。宗教は、都市の行政によってさまざまな挑戦を強いられていた空間よりも時間の体系化において若干ではあるがより重要な役割を担うようになったのである。

4) このような活動はどれも専門家を大いに必要とした。同じ場所に非常に多くの人々が住み、非常に多様性に富む交易が営まれ、中心地における専門分化が要請された（あるいは要請される可能性があった）結果、宗教的伝統においては、反動を伴う職業の細分化がもたらされた。前述の過程に支えられ、またその価値に寄与しながら、専門分化は宗教の文脈だけでなく、とりわけ都市のなかで進んでいった。奉納や祭式 *pūjā* のための菓子を製造したり、占い師としてサーヴィスの前売りをしたり、魂のケアを行ったり、聖域の管理を行ったりする者たち、すなわち宗教に関わる専門職と祭司たちは、ジェンダーや社会的地位や教育や富の度合い、という壁の向こうへと簡単に輸出されてゆく事象に沿った宗教に関わる行動の一部であった。

5) このような専門家は、一見、複数の組織化された宗教の定礎にみえるが、いまは代替となりうるものを越えてゆくと思われる一貫性のある発展をしばしば支持した。原初から、そして今日ではさらに、都市という場所は強い緊張のもとにある。権力者のみならず、対抗する可視的な勢力や、まだ見えざるものを図像化した史料も不可視の力が支柱になりうるのだと主張した。宗教に関わる行動は同じように、小家族でも拡大家族でも、近郊においても都市間のネットワークにおいても、数多く生みだされる小規模な集団の形成に寄与することができた。共有された宗教実践と宗教の場所は、このような集団の形成と定義に大いに寄与し[65]、関わりのなかった人々がまさに団結する場としてのエスニシティすら作り上げた[66]。

このような集団は、想像の共同体であれ、実在の共同体であれ、個人化の過程において発達した宗教の選択肢を安定させた[67]。宗教に関わる行動と思想は都市住民のあいだの差異の固定化とならんで、住民の均一化にも利用されたようだ。
6)「宗教」が都市の宗教史の遺産として広く浸透した伝統であるならば、「世界宗教」という形態での宗教のグローバリゼーションあるいは宗教の普遍化は、互いに少なくとも同じ程度には広く浸透した伝統である。都市がたんなる人々の集積地ではなく、内外への流出の結節点であるならば[68]、都市的であること、すなわち自己言及的な都市性の言説は、常にほかの諸都市への言及と比較を含んでいる。このような言説と都市間のネットワークにおいては、内在的あるいは超越的な「彼方」を焦点とする実践としての宗教の空間的次元が展開される。他の諸都市や土地への言及はあらゆる局地性を越える言及、すなわち天界や冥界のようなどこでもない場所への言及と同じく、宗教における媒介者（エージェント）の独立性を支えている。それらは確かに都市に生じる悪意や迫害すらからも回復する力を作り上げる助けとなる。このような観点において、都市は所与の前提であるだけでなく、宗教的言説の主題でもある。しかしここでさえ、宗教は知的言説を越えてゆく。宗教と都市は「成就しつつある」なにかである。

6. 結論

現在を中心におく偏見を乗り越えようとするとき、必ずしもすべての場面において「都市的宗教」の概念を援用することはないが、筆者の議論は以下のように要約される。(1) 我々は宗教実践の空間的性質をいっそう親しく理解しなければならない。(2)「都市のなかの宗教」や「宗教と都市」といった時間を超越した組み合わせを、宗教の変容と都市化の連関に注目して乗り越えなければならない。このような歴史的な企てを論じるさいに、以下の論点は有益だ、と結論づけることができる。(3)宗教を（能動的な）媒介者（エージェント）として (4)（受動的な）犠牲者であると同時に都市化の過程に備えてそこに関わってゆく媒介者（エージェント）として、(5)都市の状況に反応して適応した結果、都市性の一部となり、また集団を形成する媒介者（エージェント）として分析すること。筆者は「都市化」と「都市化された宗教」を対になる名辞として提示し、同じ現象の複合体において相異なるが、互いに関連する視座として示した。

本稿の主題となる議論は、宗教と都市化のあいだに生じる歴史上の偶発的な関係というよりも、両者の概念上の関係についてでもあったから、宗教と都市性が互いを形づくる状況は宗教的コミュニケーション特有の空間的特徴であり、祈り

のように単純な行動においても、方法と多層的な意味において、状況を越えたものごとに、物理的に離れた場所とヘテロトピアを参照させるが、同時に特定の場所を状況に応じて適切なものとするための基本的な道具でもある。このように、宗教実践はローカライゼーションと同様、グローバリゼーションとも両立可能である。しかし、それらは第三項、すなわち距離上の遠さと近さとも両立可能である。宗教実践はまた空間の性質の重要性を、つまり場所の空間的制約を無視して「どこにもない場所」を利用するにとどまらず、それを作り上げるものとして奉仕することができる[69]。これはジョナサン・Z・スミスのいう「どこにもない場所」として翻訳可能であり、あるいは超越の名をもって、宗教史研究における古典の多くが宗教に帰してきた独自の性質へのアプローチを可能にする。それでも、この誘惑に対抗せよと筆者は勧めたい。空間的な視座のもとによってのみ、どこでもない場所を見ることができるからである。

訳者：中西恭子（東京大学大学院人文社会系研究科研究員
／津田塾大学ほか非常勤講師）

注

1 エルフルト大学マックス・ウェーバー先端文化社会研究センターを拠点とする同名の研究グループへのドイツ研究振興協会(DFG)の研究助成(FOR2779)に感謝する。研究グループ「宗教の終焉」（マイケル・スタウスバーグ／ジェイムズ・T・ルイス）によるオスロのノルウェー先端研究センターでの研究滞在は、大量の書物を渉猟し、本稿の第一稿を書いた楽しい時間だった。マックス・ウェーバー・センターや同志社大学および東京大学での議論を通して本稿を改稿した。聴衆のみなさんの反応とアダ・タガー・コヘン教授と市川裕教授による招聘に感謝する。

2 Jonathan Z. Smith, ‘The History of the History of Religions' History,’ *Numen* 48. 2 (2001), 142 の議論を援用する。ここでは「宗教」は次のように理解されている。「個別の主題にかかわる事象とは異なるが、それを補完もする理論的研究の対象を提供する包括的なカテゴリー」。

3 この概念についてはたとえば Christoph Uehlinger, ‘Visible Religion und die Sichtbarkeit von Religion(en): Voraussetzungen, Anknüpfungsprobleme, Wiederaufnahme eines religionswissenschaftlichen Forschungsprogramms,’ *Berliner Theologische Zeitschrift* 23. 2 (2006), 165-184, および早くからある雑誌では ‘Visible Religion’ (1982-1990, Brill)と雑誌‘Material Religion’ (2005-, Berg) を参照せよ。特に‘iconic religion’については Kim Knott, Volkhard Krech, and Birgit Meyer, ‘Iconic Religion in Urban Space,’ *Material Religion* 12. 2 (2016), 123-136 を見よ。

4 Katie Day, ‘Space and Urban Religion in the United States,’ *Oxford Encyclopedia of Religion* (2017).

5 Numa Denis Fustel de Coulanges, *La cité antique, étude sur le culte, le droit, les institutions de la Grèce et de Rome* (Paris, Strasbourg: 1864).

6 Norman Yoffee and Nicola Terrenato, ‘Introduction: a history of the study of early cities,’ in *The Cambridge world history 3: Early cities in comparative perspective, 4000 BCE-1200 CE*

(Norman Yoffee ed.; Cambridge: Cambridge Univ. Press, 2015), 7 を見よ。

7 Jörg Rüpke, 'Religion als Urbanität: Ein anderer Blick auf Stadtreligion,' *Zeitschrift für Religionswissenschaft* 27. 1 (2019), 174-195.

8 François de Polignac, *La naissance de la cité grecque: cultes, espace et société VIIIe--VIIe: siècles avant J.-C.* (Textes à l'appui: Histoire classique; Paris: Découverte, 1984)/Engl. Francois de Polignac, *Cults, territory, and the origins of the Greek city-state* (Chicago: University of Chicago Press, 1995).

9 E.g. Arjan Zuiderhoek, *The ancient city* (Key themes in ancient history; Cambridge: Cambridge University Press, 2017), 65.

10 E.g. Karl-Joachim Hölkeskamp, 'Capitol, Comitium und Forum: Öffentliche Räume, sakrale Topographie und Erinnerungslandschaften der römischen Republik,' in *Studien zu antiken Identitäten* (Stefan Faller ed.; Würzburg: Ergon, 2001), 97-132; 'Raum – Präsenz – Performanz. Prozessionen in politischen Kulturen der Vormoderne – Forschungen und Fortschritte,' in *Medien der Geschichte – Antikes Griechenland und Rom* (O. Dally, et al. eds.; Berlin, 2014), 359-395; 'Performative turn meets spatial turn,' in *Raum und Performanz: Rituale in Residenzen von der Antike bis 1815* (Dietrich Boschung, Karl-Joachim Hölkeskamp, and Claudia Sode eds.; Stuttgart: Franz Steiner, 2015), 15-74; Rodney D. Fitzsimons, 'Urbanization and the Emergence of the Greek Polis: The Case of Azoria, Crete' in *Making Ancient Cities: Space and Place in Early Urban Soieties* (Andrew T. Creekmore, III and Kevin D. Fisher eds.; Cambridge: Cambridge University Press, 2014), 220-256.

11 順に挙げる。Robert A. Orsi, *The Madonna of 115th Street: Faith and community in Italian Harlem, 1880-1950* (New Haven: Yale Univ. Press, 1985); 'Everyday Miracles: The Study of Lived Religion,' in *Lived Religion in America: Toward a History of Practice* (David D. Hall ed.; Princeton: Princeton University Press, 1997), 3-21; *Gods of the city: Religion and the American urban landscape* (Religion in North America; Bloomington, Ind.: Indiana Univ. Press, 1999); 簡潔にまとめられたものでは David Garbin and Anna Strhan eds., *Religion and the Global City* (Bloomsbury Studies in Religion, Space and Place New York: Bloomsbury, 2017), 5 がある。

12 Jörg Rüpke, 'Lived Ancient Religion: Questioning "Cults" and "Polis Religion",' *Mythos* n. s. 5 (2011), 191-204; *On Roman Religion: Lived Religion and the Individual in Ancient Rome* (Townsend Lectures/Cornell studies in classical philology; Ithaca, NY: Cornell University Press, 2016); 'Lived Ancient Religion,' *Oxford Research Encyclopedia, Religion* (2019).

13 Rubina Raja and Jörg Rüpke, 'Appropriating Religion: Methodological Issues in Testing the "Lived Ancient Religion" Approach,' *Religion in the Roman Empire* 1. 1 (2015), 11-19; 'Archaeology of Religion, Material Religion, and the Ancient World,' in *A Companion to the Archaeology of Religion in the Ancient World* (Rubina Raja and Jörg Rüpke eds.; Malden: Wiley, 2015), 1-25.

14 Jörg Rüpke, 'Religious Agency, Identity, and Communication: Reflecting on History and Theory of Religion,' *Religion* 45. 3 (2015), 344-366.

15 Clifford Ando and Jörg Rüpke eds., *Public and Private in Ancient Mediterranean Law and Religion* (Religionsgeschichtliche Versuche und Vorarbeiten 65; Berlin: de Gruyter, 2015) を見よ。

16 Janico Albrecht et al., 'Religion in the Making: The Lived Ancient Religion Approach,' *Religion* 48. 4 (2018), 568-593.

17 Lily Kong, 'Mapping "New" Geographies of Religion: Politics and Poetics in Modernity,' *Progress in Human Geography* 25. 2 (2001), 211-233 を見よ。

[18] Peter Hopkins, Lily Kong, and Elizabeth Olson eds., *Religion and place: Landscape, politics and piety* (Dordrecht: Springer, 2013), and in particular 16-18. Cf. the remarks by Garbin and Strhan, *Religion,* 6 を見よ。

[19] Peter van der Veer, 'Introduction: Urban Theory, Asia and Religion,' in *Handbook of religion and the Asian city. Aspiration and urbanization in the twenty-first century* (Peter van der Veer ed.; Oakland, Calif.: University of California Press, 2015), 2-12.

[20] E.g. Daniel P. S. Goh and Peter van der Veer, 'Introduction: The sacred and the urban in Asia,' *International Sociology* 31. 4 (2016), 367-374; Knott, Krech, and Meyer, 'Iconic religion".

[21] Michel Foucault, 'Space, Knowledge, and Power,' in *The Foucault Reader: An Introduction to Foucault's Thought* (P. Rabinow ed.; London, 1984), 239-256; Henri Lefebvre, *La production de l'espace* (Collection société et urbanisme; Paris: Éd. Anthropos, 1974); and Edward W. Soja, *Postmetropolis: Critical studies of cities and regions*, First published ed. (Oxford: Blackwell Publishers, 2000); *Postmodern Geographies* (London and New York: Verso, 1989); *Thirdspace: Journeys to Los Angeles and Other Real-and-Imagined Places* (Oxford: Blackwell, 1996); 'Regional Urbanization and the Ende of the Metropolitan Era,' in *The New Blackwell Companion to the City* (Gary Bridge and Sophie Watson eds.; Wiley-Blackwell Companions to Geography Malden, Mass.: Wiley-Blackwell, 2013), 679-689.

[22] Doreen H. Massey, *Spatial Divisions of Labour: Social Structures and the Geography of Production.* (London: 1984); Martina Löw, *Raumsoziologie* (Wissenschaft 1506; Frankfurt/Main: Suhrkamp, 2001)/*Sociology of space. Materiality, social structures, and action* (Cultural sociology; New York: Palgrave Macmillan, 2016); *Soziologie der Städte* (Frankfurt am Main: Suhrkamp, 2008); 'The intrinsic logic of cities: Towards a new theory on urbanism,' *Urban Research and Practice* 5 (2012), 303-315; Helmuth Berking and Martina Löw eds., *Die Eigenlogik der Städte: Neue Wege für die Stadtforschung* (Interdisziplinäre Stadtforschung 1; Frankfurt/Main: Campus, 2008); Helmuth Berking et al. eds., *Negotiating Urban Spaces: Interaction, Space and Control* (Bielefeld: transcript Verlag, 2006). 都市をめぐる以上の省察は 1930 年代のシカゴ学派における都市社会学研究とその後継者たちに遡る。

[23] Kim Knott, 'Spatial Theory and the Study of Religon,' *Religion Compass* 2. 6 (2008), 1102-1116; *The location of religion: A spatial analysis* (London: Equinox, 2005); 規範的研究として'Walls and Other Unremarkable Boundaries in South London: Impenetrable Infrastructure or Portals of Time, Space and Cultural Difference?,' *New Diversities* 17. 2 (2015), 15-34 がある。

[24] Stephan Lanz, 'Assembling Global Prayers in the City: An Attempt to Repopulate Urban Theory with Religion,' in *Global prayers: Contemporary manifestations of the religious in the city* (Jochen Becker, et al. eds.; *MetroZones* 13, Zürich: Müller, 2014), 25.

[25] Ibid., 26.

[26] Ibid., 24 and 28 (quotation); 彼は「感覚的形態」としての特徴付けを加えて、Birgit Meyer, *Aesthetic formations. Media, religion and the senses* (Religion, culture, critique; New York: Palgrave Macmillan, 2009), 201. Ruth Marshall, *Political spiritualities: The Pentecostal revolution in Nigeria* (Chicago: University of Chicago Press, 2009) を引用して論じている。

[27] Garbin and Strhan, *Religion*, 特に 6-11 を見よ。

[28] 後者については Marian Burchardt and Monika Wohlrab-Sahr, ''Multiple Secularities: Religion and Modernity in the Global Age' – Introduction,' *International Sociology* 28. 6 (2013), 605-611 を見よ。

[29] Peter Beyer, 'Questioning the secular/religious divide in a post-Westphalian world,' ibid., 676.

[30] P. J. Aspinall and M. Song, 'Is race a 'salient ...' or 'dominant identity' in the early 21st century: The evidence of UK survey data on respondents' sense of who they are,' *Social Science Research*

42. 2 (2013), 547-561.

[31] たとえば中国については、Anna Sun, 'The Study of Chinese Religions in the Social Sciences: Beyond the Monotheistic Assumption,' in *Religion and Orientalism in Asian Studies* (K. Paramore, ed.; London: Bloomsbury, 2016), 51-72 を見よ。

[32] すでに古代についても、大きな差異は状況に応じて強調されることがある。このことについては Laurens Ernst Tacoma, *Moving Romans: Migration to Rome in the Principate*, First edition ed. (Oxford: Oxford University Press, 2016) and Greg Woolf, 'Movers and Stayers,' in *Migration and Mobility in the Early Roman Empire* (Luuk de Ligt and Laurens Ernst Tacoma eds.; Leiden: Brill, 2015), 438-461 を見よ。

[33] Garbin and Strhan, *Religion*, 15-18; たとえば以下の文献も参照せよ。Sara Moser, 'New Cities in the Muslim World: The Cultural Politics of Planning an 'Islamic' City,' in *Religion and place: Landscape, politics and piety* (Peter Hopkins, Lily Kong, and Elizabeth Olson eds.; Dordrecht: Springer, 2013), 39-55, 「新たなイスラーム都市」について、あるいは van der Veer の「序論」、「世界化」について。

[34] Hubert Cancik and Jörg Rüpke eds., *Römische Reichsreligion und Provinzialreligion* (Tübingen: Mohr, 1997); Jörg Rüpke ed., *Antike Religionsgeschichte in räumlicher Perspektive: Abschlussbericht zum Schwerpunktprogramm 1080 der Deutschen Forschungsgemeinschaft 'Römische Reichsreligion und Provinzialreligion'* (Tübingen: Mohr Siebeck, 2007); 'Reichsreligion? Überlegungen zur Religionsgeschichte des antiken Mittelmeerraums in römischer Zeit,' *Historische Zeitschrift* 292 (2011), 297-322; 'Roman Religion and the Religion of Empire: Some Reflections on Method,' in *The Religious History of the Roman Empire: Pagans, Jews, and Christians* (John A. North and Simon R.F. Price eds.; Oxford: Oxford University Press, 2011), 9-36. Translocality: Ulrike Freitag and Achim von Oppen, 'Introduction: "Translocality": An Approach to Connection and Transfer in Area Studies,' in *Translocality: The Study of Globalising Processes from a Southern Perspective* (*eaed.* eds.; Studies in Global Social History 4, Leiden: Brill, 2010), 1-21.

[35] Knott, Krech, and Meyer, 'Iconic religion'を見よ。繰り返すが、なによりもまず偶発的な変数としての空間に注意を喚起している。

[36] Jenniffer Allen, Scott Robinson and Peter Taylor, *Working, Housing: Urbanizing The International Year of Global Understanding - IYGU* (2016), 18 を見よ。

[37] Markus Hirschauer, 'Un/doing Differences: Die Kontingenz sozialer Zugehörigkeiten/Un/doing Differences: The Contingency of Social Belonging,' *Zeitschrift für Soziologie* 43. 3 (2014), 183 の文章を援用した。

[38] 「特別(special)」の概念については Ann Taves, *Religious experience reconsidered: A building block approach to the study of religion and other special things* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 2009); 'Experience as site of contested meaning and value: The attributional dog and its special tail,' *Religion* 40. 4 (2010), 317-323 を見よ。

[39] Volkhard Krech, 'Dynamics in the History of Religions - Preliminary Considerations of Aspects of a Research Programme,' in *Dynamics in the history of religions between Asia and Europe: encounters, notions, and comparative perspectives* (Volkhard Krech and Marion Steinicke eds.; Dynamics in the history of religions 1, Leiden: Brill, 2012), 24.

[40] Rüpke, 'Religious Agency.'

[41] Michel de Certeau, *Arts de faire*, Nouvelle ed. par Luce Giard ed. (Paris: Gallimard, 2007)/*The practice of everyday life* (Berkeley: University of California Press, 1984).

[42] Yamini Narayanan, *Religion, heritage and the sustainable city: Hinduism and urbanisation in Jaipur* (Routledge research in religion and development; Abingdon: Routledge, 2015).

[43] Michael Stausberg, *Religion and tourism: Crossroads, destinations, and encounters* (London: Routledge, 2010)を見よ。

[44] Thomas A. Tweed, *Crossing and dwelling: A theory of religion* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2006; repr., 2008); cf. 'Space,' *Material Religion* 7 (2011), 116-123.

[45] 宗教の形成を縦横無尽に類推するため、文献は無限にある。

[46] Marc Augé, *Non-lieux: Introduction à une anthropologie de la surmodernité* (La librairie du XXe siècle; Paris: Seuil, 1992).

[47] 文化の強化の概念については Douglas Davies, 'Cultural Intensification: A Theory for Religion,' in *Religion and the Individual: Belief, Practice, Identity* (Abby Day ed.; Bodmin, Cornwall: MPG Books, 2008), 7-18 を見よ。

[48] See Robinson, Scott, and Taylor, *Working, Housing,* 18.

[49] Cf. Greg Woolf, *The Life and Death of Ancient Cities: A Natural History* (New York: Oxford University Press, 2020), 35.

[50] Cf. Robinson, Scott, and Taylor, *Working, Housing,* 5: 「以下の二つの特徴を鍵として、都市はほかの人間の共住空間と区別される。つまり、都市は濃密で大規模な、共住し、共働する人間のクラスタを形成するとともに、内外への無数の流れの焦点でもある。単一の文化を保とうとするよりもつねによりコスモポリタンであろうとする都市をとりわけ活動的で賑やかな場所とするゆえんである」。

[51] Susanne Rau, *Räume der Stadt. Eine Geschichte Lyons 1300-1800* (Frankfurt am Main: Campus, 2014), 405-6.

[52] E.g. Neil Brenner and Christian Schmid, 'The "Urban Age" in Question,' *International Journal of Urban and Regional Research* 38. 3 (2014), 731-755.

[53] Inger Furseth, 'Why in the city? Explaining urban fundamentalism,' in *The fundamentalist city? Religiosity and the remaking of urban space* (Nezar AlSayyad and Mejgan Massoumi eds.; London: Routledge, 2011), 46 はこのように論じている。戦争状態における宗教の役割については以下の文献を見よ。Jörg Rüpke, 'Krieg,' in *Handbuch religionswissenschaftlicher Grundbegriffe* (Hubert Cancik, Burkhard Gladigow, and Karl-Heinz Kohl eds.; Stuttgart: Kohlhammer, 1993), 448-460; 'Holy War,' *The Brill Dictionary of Religion* 2 (2006), 877; 'War/Armed Forces,' *The Brill Dictionary of Religion* 4 (2006), 1960-1963.

[54] 後者についてはたとえば Ara Norenzayan, *Big gods: How religion transformed cooperation and conflict* (Princeton: Princeton University Press, 2013)を見よ。筆者による批判は Jörg Rüpke, 'Is history important for a historical argument in religious studies,' review of Norenzayan, Big Gods, *Religion* 44. 4 (2014), 645-648 である。より一般的な話題は Michael Stausberg, 'Bellah's Religion in Human Evolution: A Postreview,' *Numen* 61. 2-3 (2014), 281-299 を見よ。

[55] 異化については Yi-Fu Tuan, *Space and place: The perspective of experience* (Minneapolis, Minn.: Univ. of Minnesota Press, 1977)を見よ。加えて、以下の文献も参照せよ。Helmuth Berking, 'Contested Places and the Politics of Space,' in *Negotiating Urban Conflicts: Interaction, Space and Control* (id. *et al* eds.; Bielefeld: transcript, 2006), 29-39. ローマについては以下の文献を参照せよ。Jean Christian Dumont, 'L'espace plautinien: de la place publique à la ville,' *Pallas* 54 (2000), 103-112; Carlos R. Galvao-Sobrinho, 'Claiming places: Sacred dedications and public space in Rome in the Principate,' in *Dediche Sacre nel mondo greco-romano: Religious Dedications in the Greco-Roman World* (John Bodel and Mika Kajava eds.; Acta Instituti roman Finlandia, Rome: Institutum Romanum Finlandiae 2008), 127-159; Harry O. Maier, 'From Material Place to Imagined Space: Emergent Christian Community as Thirdspace in the Shepherd of Hermas,' in *Early Christian Communities between Ideal and*

Reality (Mark R. C. Grundeken and Joseph Verheyden eds.; WUNT Tübingen: Mohr Siebeck, 2015), 143-160, および Jörg Rüpke, 'Crafting complex place: Religion, antiquarianism, and urban development in late republican Rome,' *Historia Religionum* 9 (2017), 109-117.

56 議論については Jörg Rüpke, *Urban Religion: A historical approach to urban growth and religious change* (Berlin: de Gruyter, 2020), 88-113 を見よ。

57 階層を形成する権力あるいは権威における、対立しまた変容するシステムの多様性の観念については、Alison E. Rautman, 'Hierarchy and Heterarchy in the American Southwest: A Comment on Mcguire and Saitta,' *American Antiquity* 63. 2 (1998), 327 を Crumley による定義「ヘテラルキーとは、構成要素が(1)「順位をもたないがゆえの潜在的な可能性（中略）」と／(2)あるいは「さまざまな方法で、構造的な要求によって順位を与えられる」がゆえの潜在的な可能性をもつシステムである」とあわせて参照せよ。

58 Cf. Moser, 'New Cities". 古代については Carla Sulzbach, 'From Urban nightmares to Dream Cities,' in *Constructions of Space V: Place, Space and Identity in the Ancient Mediterrranean World* (Christl M. Maier and Gert T. Princeloo eds., LHBOTS 5; New York: Bloomsbury, 2015), 226-243 を見よ。

59 Alan Strathern, *Unearthly Powers: Religious and Political Change in World History* (Cambridge: Cambridge University Press, 2019).

60 Peter Jackson ed., *Horizons of Shamanism: A Triangular Approach to the History and Anthropology of Ecstatic Techniques* (36; Stockholm: Stockholm University Press, 2016).

61 Georg Simmel, 'Individualismus,' *Marsyas* 1 (1917), 33.39.

62 Manfred Russo, *Projekt Stadt: Eine Geschichte der Urbanität* (Basel: Birkhäuser, 2016), 67-164.

63 Jörg Rüpke, *Pantheon: A New History of Roman Religion* (Princeton: Princeton University Press, 2018), 234-247.

64 Jörg Rüpke, 'Urban Selves: Individualization in the Cities of the Ancient Mediterranean,' in *The Self in Antiquity* (Maren R. Niehoff and Joshua Levinson eds.; Leiden: Brill, 2019), 391-416; *The Individual in the Religions of the Ancient Mediterranean* (Oxford: Oxford University Press, 2013); Martin Fuchs *et al* eds., *Religious Individualisations: Historical Dimensions and Comparative Perspectives* (Berlin: de Gruyter, 2020).

65 Éric Rebillard and Jörg Rüpke, 'Introduction: Groups, Individuals, and Religious Identity,' in *Group Identity and Religous Individuality in Late Antiquity* (*id.* eds.; CUA Studies in Early Christianity, Washington, DC: Catholic University of America Press, 2015), 3-12.

66 Joane Nagel, 'Constructing Ethnicity: Creating and Recreating Ethnic Identity and Culture,' *Social Problems* 41. 1 (1994), 152-176; Rogers Brubaker, *Ethnicity without Groups* (Cambridge: Harvard Univ. Press, 2004).

67 Jörg Rüpke, *Religious Deviance in the Roman World: Superstition or Individuality*, trans. David M. B. Richardson (Cambridge: Cambridge University Press, 2016).

68 Robinson, Scott, and Taylor, *Working, Housing,* 5.

69 この用語については Joanne Punzo Waghorne ed., *Place/No-Place in Urban Asian Religiosity* (ARI - Springer Asia Series Singapore: Springer, 2017)を見よ。